

レジュメ

Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning Vol.3

Part 6 International Communication and Pragmatics

Chapter 29: Teaching and Learning International Communication: *Research in Six Approaches*

pp.399-415

Lixian Jin and Martin Cortazzi

発表の構成

- 1) 著者情報
- 2) 論文の構成
- 3) 主な問い
- 4) 論文の要約
- 5) 考察したい事
- 6) 参考文献

【おねがい】

このレジュメは、東京学芸大学大学院国語教育専攻日本語教育コースの授業「日本語教育方法論演習」（授業担当者：南浦涼介）での大学院生で取り扱った、Hinkel, E. (Ed.) 2017. *Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning*. の発表のレジュメです。教育的価値、資料的価値としてウェブでの掲載を行っておりますが、いわゆる「論文」ではありませんので、論文等への引用や掲載は固くお断りいたします。また、分析対象の著作権は著作者、資料文書の著作権は発表者に記しますので、無断転載はご遠慮ください。質問については、東京学芸大学南浦研究室 (<http://minamiura-lab.com/>) までお願いいたします。

1. 著者情報

①Jin, Lixian (左)

ド・モンフォール大学、言語学と異文化学習の教授

②Cortazzi, Martin (右)

ノッティンガム大学、言語学と異文化コミュニケーションの教授

2. 論文の構成

見出し	日本語訳
Introduction	はじめに
Importance of IC for Research	研究用 IC の重要性
Some Key Terms (割愛)	用語の定義 (割愛)
Theoretical Themes Related to Teaching IC	IC 教育の理論的テーマ
Six Approaches in Research of Teaching and Learning IC	IC の教育と学習に関する研究の 6 つのアプローチ
Conclusions and Further Directions	結論と展望

3. 主な問い

- i 文化間コミュニケーション教育、学習、研究の意義や動機は何か
- ii 言語教育における位置づけはどこか

4. 論文の要約

はじめに

文化間コミュニケーション（以下 IC）とは、異なる文化を持った人とのコミュニケーションを取り扱う実践に研究を加える分野である。

ICに関心を向けることによって、言語教育と学習に対するビリーフとその実践の広さと深さと焦点を改めることができる。

ICは学際的な分野であり、多面的なアプローチが可能である。

ICの教え方は教育場面の設定によって異なる。学習者の学習レベルと言語能力、学習目的、状況と施設、対象とする文化との接触と経験などが主な変数である。さらに、使用言語が学習者の第一言語か第二言語か、またはそれ以外であるか、利用可能な IC の場面が教室の中、地域の多言語多文化コミュニティ、国際学生や国際スタッフのいる施設なのかも変数の例である。

IC研究は、参加者のマインドフルネス（自己意識）、個性と資質、批判的で創造的な思考の発達の必要性を強調する。これらの項目は教師と研究者にも求められるところが難点である。

研究用 IC の重要性

教育の場で学ばれる言語は、単一の文化的集団と 1 対 1 の関係にあるものではない。世界中の多様な母語話者、ディアスポラに住む話者、共通語話者など、その関連する文化的文脈は、さまざまである。したがって、言語教育と学習は、2 つ以上の文化の間のコミュニケーションを伴う。その文化の特徴もまたコミュニケーションの一環である。

ICを開発する実用的、教育的、人道的価値はよく知られている。通信技術の発展、人口動態の変化の把握、少数民族の声や社会貢献への認識、貿易と旅行などが挙げられる。さらに、移住者の受け入れと健康、教育および社会サービス、外交、国際関係、平和構築などの分野において活躍できる。教育においても、ICは語学教室の中はもとより、留学生や教師にとっては教育目標の達成の観点からみて組織的な重要性も高く、地元の人との個人的な交流や国際的な協力、協働のためにもなる。

さらに、研究のまだ足りない、価値あるとされる還元項目としては、文脈に応じた言語的、社会的および文化的多様性の実用的知識、自己の文化的アイデンティティや価値観、家庭の文脈、好奇心、柔軟性、思いやりのような豊かな人間の資質が挙げられる。

IC 教育に関する理論的研究テーマ

また、学習言語に関する IC 研究において、IC 研究者の生活に関する生活史（ナラティブ）研究は、成功した適応や社会生存、学業実績の模範例であるため、研究対象として特に魅力的である。さらに、アイデンティティなどのようなテーマは、帰属意識もしくは疎外感を呼び起こしうるため、学習者や研究者自身に関わってくる。また、倫理のようなテーマには3つの意味がある。①すべての IC 参加者を尊敬と尊厳をもって扱う必要性。②職場でのコミュニケーションや社会的正義などにおける倫理の認識価値。③この分野において研究を行うための倫理の重要性。

研究者は、すべてのトピックについて IC 意識しなければならない。

IC は言語知識と技能の発達を支える重要な内容やプロセスと密接に関連する。ところが、L2 での相互作用を通して IC 能力を開発するには、相当な語学力が必要とされるところが難点である。

IC 教育と学習に関する研究の6つのアプローチ

1 言語学的アプローチ：コミュニケーションのパターンにおけるコミュニティの慣行

書き言葉も話し言葉も文化的共同体によって談話構成が異なる。教師は正しさや規則といった基準を適用するが、表現の「適正」や「有効性」といった IC の基準も言語学的生態系の一部として重要である。また、一般に認められているもう1つの IC の基準として「適応性」が挙げられるが、これは必ずしも L2 学習者が L2 規則に適応するように制約されているとは限らず、学習者による規則の適応、産出をも意味しうる。

談話構成の差異の具体例としては、ピッチ、イントネーション、休止や特定のフレーズの使用、談話マーカなどが挙げられる。発話内容の誤解だけでなく、相手そのものを見誤り、グループやコミュニティのステレオタイプを生み出したり強化したりするといった誤認を招く可能性もある。

→フィンランド人対アメリカ人の例、フィンランド人対ギリシャ人の例 (pp. 404-405)

2 文化の比較と文化の階層

Edward Hall (1966, 1985, 1990) の3つの文化の階層

1) 時間の観念

一次元的 (monochronic)

時間は直線的、結果重視、時間に正確が否か、約束を守るかどうか

多次的 (polychronic)

時間は流動的、人間関係、文脈重視

2) 意思疎通の回り方

共有されている (とされる) 情報や知識が多い (high context)

明示的なやり取りが少ない

共有されている（とされる）情報や知識が少ない（low context）

明示的なやり取りが多い

3) 人と人が交流する際の個人的な空間(proxemics, 近接学)

会話時の距離が近ければいいか (high contact) 遠ければいいか (low contact)

Geert Hofstede (2003, Hofstede 他 2010)の6つの文化の階層

- 1) 個性主義 - 集団主義である。
- 2) 権力距離の大小
- 3) 男性性 - 女性性
- 4) 不確実性回避の強弱
- 5) 長期主義 - 短期主義
- 6) 幸福に関する快樂主義 - 禁欲主義。

これらの階層は広く IC 教育に取り入れられているが、現在の傾向では学生の批判的思考が重視されている。なお Hofstede に関しては、本人自身も、これらの項目はすべてを包括的に説明しきるためのものではなく、単に比較のための重要なポイントであると主張している。個人やグループのバリエーションは許容される。

IC の教育と研究のための6つのアプローチのいずれにおいても、注意しなければならない落とし穴：①文化を対象（統一, reification）として扱うのではなく、むしろプロセスや実践として扱うこと。②文化は単純な特徴（本質主義や還元主義, essentialism and reductionism）に還元することはできない。③文化は均一なものではなく（均質化, homogenization）、変化を常に含む。④現代の文化は孤立（分離, separation）しておらず、文化は互いに影響を及ぼし、融合する。

また、文化を考える際、「どちらであるか」といった二分法に固執しないよう、Martin と Nakayama (2012) は、組み合わせの示唆を可能にする6つの弁証法を提唱している。

3 能力に基づくアプローチ

言語教育における IC 能力を開発することは、IC の相互作用に適切かつ効果的かつ適応的に参加するために必要な知識、能力、技能を開発することであると考えられる。

Byram (1997 : 34, 47-54) の IC コミュニケーション能力に関する項目は言語学、社会言語学、談話、IC 能力、教室やフィールドワークにおいて、あるいは独学により育まれた批判的文化意識に関する能力である。

Spencer-Oatey 他は IC 接触と開発の「生活環」に関して、5つの段階で適用される能力の枠組みを考案している。準備、開始、実験、確立、伝達である。

能力項目は他にも多数あるが、これらの能力のほとんどは、IC に限定されるものではなく、一般的に教育や生活において望ましい資質である。そして IC は言語教育において

は、それらの成長を大きく促す。

4 問題解決アプローチと手法

このアプローチは、研究が問題に基づく取り組みであるため、ICの研究者のための訓練である。課題の探索、関連知識の考慮、可能な解決策の列挙、報告書の作成といった段階を経て、ある状況において一連の問題を提起し、共同研究グループで訓練生に解決させるものである (Boud and Feletti, 1997)。

アメリカのIC訓練は伝統的にはワークショップを通じて他国でのインターンシップや社会生活といったプログラム (Kohls and Knight, 20:5) を控える専門家の問題解決力を育成するために作られるが、大学生が対象である場合もある。多くの場合、重大な事件を提起し、何が起こったのか、なぜ起こったのかを議論、分析、考察させる。さまざまな文化的観点から取られるいくつかの選択肢が提供され、訓練生は自身以外の観点から問題を説明しなければならない。後、各選択肢に関して解説や結果がフィードバックとして与えられる。訓練生は想像していなかったかも知れない意見を見て、選択の背後にある文化的価値に関する知識が増える。

5 経験的アプローチと手法

経験的アプローチは、文化との接触や人との対面の中になる個人的な発見を通じた学習の発展を目的とする。ICへの経験的アプローチは、伝統的には文学、映画、ドラマ、ロールプレイング、さらに最近ではバーチャル環境やソーシャルメディアにより開発されてきた。理論的支持は、Kolb (2014) の4段階の経験的サイクルにある。①事物を経験し、②振り返り反省し、③理解し結論を導き出し、最後にはそれを (4) 適用し試す。

6 実践の実行

単なる教室学習の練習ではなく、変革をなすうる献身的な行動を通じて社会理想を達成するための努力を実践(praxis)とする。Sorrellsは、社会的整合性は責任感を持って思いやりに基づいて行動することにより発達すると考える。(Sorrells and Sekimoto, 2015; Sorrells, 2015)。Linderman (1926) は、本物の教育は「考える」ことと「行動する」ことを共にすると主張し、学習者の経験(「人間教科書」)の状況に訴えた。また、学習は学習者が将来の行動のために自分の経験を認識し評価するプロセスであるとした(1926: 3-7)。Sorrells (2016) は、紛争解決のプロジェクトを含む、移住者や難民の関わっている実践的なコミュニティプロジェクトへの参加は参加者に力を与えると主張している。

結論と展望

教師や研究者にとってICは本質的に専門的で個人的な成長を意味する。他人の考え方を想像し、それを仲介、伝達するには想像力と共感が必要である。この観点から言えば、

教師は人の文化の仲介人であり、その生徒が社会において文化の仲介人になるのを手助けしていると言える。

5. 考察したい事

i 発表者がこれまで受けてきた日本語教育（の授業、教室、学習場面）には IC は盛り込まれていなかったのはなぜか。日本語日本文化研修留学生という身分で日本に留学していた時も日本文化を理解させるための「異文化理解」や「異文化コミュニケーション」という授業、ワークショップ、その他の企画はあって、言語教育そのものにはなかった。

ii 盛り込むにはどうしたらいいのか。日本語教育固有の落とし穴はないか。

6. 参考 URL

<http://www.dmu.ac.uk/research/research-faculties-and-institutes/health-and-life-sciences/circl/lixian-jin.aspx> (閲覧日：2017年5月20日)

<http://www.nottingham.edu.cn/en/education/people/martin-cortazzi.aspx> (閲覧日：2017年5月20日)

7. ディスカッションのまとめ

IC教育のための6つのアプローチは、発表者にとって抽象的で位置づけるのが難しかったが、ディスカッションを通して、IC教育を個人（自分自身）→相手→社会（へのアウトプット）といった役割（また位置づけ、文脈）において捉えなおすことができた。さらに、6つのアプローチをも明確な段階づけをもって捉えなおし、位置づけることができた。捉え方（配列）の1例に過ぎないが、例えば、言語学的なアプローチと比較文化的なアプローチは個人（自分自身）の情報や知識の獲得に役立ち、能力的なアプローチは相手とのコミュニケーションを図る際に役立ち、問題解決的、経験的、実践的なアプローチはIC教育の最終目的である（とすることのできる）社会変革に貢献する役割を果たすと考えることができる。無論、他の捉え方や位置づけも可能であるとして、このようにIC教育を具体的な文脈に置くことにより、教育現場と社会への双方向的な役割が垣間見え、実践が動機付けられると思われる。